

異世代間におけるネットワークの可能性

— 祖父母と孫の交流関係から —

山崎美佐子 伊那信用金庫
 角間 陽子 松本短期大学
 草野 篤子 生活科学教育講座

キーワード：異世代間，ネットワーク，祖父母と孫，交流関係

1 はじめに

20世紀は経済成長に伴う利便性追求の時代であった。産業構造の変化による都市部への移動は地方の過疎化を招き、人口のアンバランスが顕著となった。高度情報化によりコミュニケーションの手段としてのハード面は発達し整備されていったが、一方で人間関係の固定化、希薄化をももたらした。新たに生み出された価値観が既存のそれと交錯しているかのように見えるが、多様化した文化は小集団や各世代によって分断され、それぞれがバリアを形成している。

少子高齢化により家族の規模は縮小し、家族形態は単純化した。かつて、拡大家族において複雑に交錯していた人間関係が成立しなくなり、家族の機能低下が注目されるようになってきた。

牧野カツコが24年前に指摘した、教育機能の回復のために、現代家族の弱さと教育機能上の問題点を十分に認識し、構造的・機能的弱さをもつならばなお、あえて、それを意図的に補っていかねばならないこと、その上で、家族では受け持ちきれない役割を、地域の人々や子どもの集団や、親族などの他の人々、集団に受けもってもらうことを積極的に行うこと¹⁾は、21世紀を迎えた現代もなお、継続している課題である。

一方でバブル崩壊以降の不況に代表される閉塞感も強く、右肩上がりの経済成長を望むことは非現実的であろう。そこで問われはじめたのが「生活の質 (QOL: Quality of Life)」であり、多様化・国際化や、簡便性・経済性を追求し享受し続けた結果、食の安全性を脅かす問題が次々と表出し、スローフードや地産地消、食育が注目され重視され始めた食生活の現状はその一例である。

21世紀の少子・高齢社会においては、家族の場以外でも、高齢者と子どもをはじめとした多世代が共存・協力してコミュニティを形成していくことが緊急な課題となっている²⁾。しかし、緊急な課題であることは認識しつつも、これまでの変化からもたらされた多様な問題が依然として存在している現実のなかでこれらの動きを押し進めていくことに対する困難が山積しているのが実状である。

信州大学では1998年4月、角尾(草野)篤子の発案によりプロジェクト「世代間交流」がスタートした。また同年7月、アメリカのテンプル大学世代間学習センター所長、ナンシー・ヘンケン博士の来日を機として、日本世代間交流ネットワークが設立された。「世代間交流とは何か」を学ぶ研究会から始まったこのプロジェクトは、講演会およびシンポジウム、公開授業、地域の女性による着付けプログラム、ポットラック・パーティ、学生の中・高年の方々に対する聴き取りプログラム、外国人留学生のための日本語プログラム、ニュースレターの発行、ホームページの開設等の活動を継続し、成果を積み重ねながら現在に至っている。

世代間交流とは、子ども、青年、中・高年がお互いに自分たちのもっている能力や技術を出し合

って、自分自身の向上と自分の周りの人々や社会に役に立つような健全な地域づくりを実践する活動で、一人ひとりが活動の主役となることである。教育、健康増進、犯罪防止、治安維持、社会で孤独な状態におかれた人たちの問題、地域の再活性化、環境、介護、自立、家族と地域社会との絆を強める活動であり、個人や家族、地域において若年世代も中・高齢世代も共に生きる社会の貴さと楽しさ、喜びを見出すことで、健全で豊かな社会の再構築を目指している。

伝統的な社会では、高齢者は若者や子どもがもっていない知恵や英知、技術や経験をもっているということで、社会のリーダーシップを取ることができた。家庭においても祖父母は経験豊かな知識をもち、子世代や孫世代をリードする立場にたっていた。同時に、若年世代との関係において高齢者は「古い」を自覚し、老年期の意味と社会における役割を認識することもできた³⁾のである。

また、祖父母と同居する家族や姉のいる家庭で非行発生率が低い理由は、両親の機能不全を補って、父の代わりを祖父が、母の代わりを祖母や姉が果たしてくれた結果であり、親の機能不全の重症化が進んでいるのに、逆にこれを代行してくれる者が昔のようにいない⁴⁾との指摘もある。

かつては家庭に祖父母以外に数多くの兄弟姉妹が存在し、多くの人間関係が子どもの誕生のときから生じた。しかし現在の家庭にはそのような人間関係や役割が消滅してしまっている。これまで自然に行われてきた異世代間の日常的な交流は著しく減少している。それは家庭内のみならず地域においても同様であって、意識的かつ意図的にプログラム化しなければ失われていくばかりなのである。

身近な存在としての異世代である祖父母と孫の交流について、実態や質あるいはそれらに影響する要因を明らかにした既存研究には、三世代家族における祖父母と孫の親密さや祖父母・孫関係の種類、祖父母の座の安定性といった観点から考察したもの⁵⁾、孫の立場から交流の方法および働きかけの主体、交流に影響を与える要因を解明したもの⁶⁾、祖父母の立場から孫との交流実態を明らかにしたもの⁷⁾、祖父母と孫の居住関係別に交流の規定要因を検討したもの^{8)・9)}、福祉・高齢者観とその形成要因を調査したもの^{10)・11)}などがある。また、交流の意識や実態に加えて祖父母の育児支援、すなわち「孫育て」を視野に入れたもの^{12)・13)・14)・15)}も多い。さらに、高齢者学習に意欲を持ったための内容や方法を検討したもの¹⁶⁾や、高齢者に関する学習の効果¹⁷⁾など、学校教育や親族以外の高齢者を対象とした研究も増えてきている。

地域社会における異世代間の交流機会が減少している現状を鑑み、祖父母-孫-子ども夫婦(孫の親)の関係を意識的に捉え、家族内の異世代間交流について検討する意義は大きい。さらにこのネットワークは、家族・親族間の結びつきから地域におけるつながりへと発展していかなければならない。本研究における親族関係である祖父母・孫の調査は第一段階としてのものであり、その結果を地域における子ども、若者、中・高年世代コミュニティを再構築するための一助とすることを目的として実施した。

2 方法

2000年8月中旬から10月中旬にかけて、長野市・更埴市(現在は千曲市)の10箇所の保育園に孫が通う祖父母を対象に、質問紙による配票調査を行った。調査票は在籍園経由で園児の祖父母に配布した。配票数は827票で、441票を回収し、うち426票が有効であった。回収率は53.3%、有効率は51.5%であった。

3 結果・考察

(1) 属性

調査対象者は男性（祖父）が94名で女性（祖母）が323名であり、平均年齢はそれぞれ67.5歳と62.7歳となった。男性は「65歳～69歳」と「70歳以上」がいずれも34.0%となり、65歳以上が68.0%であった。それに対して女性では「59歳以下」が31.0%で最も多く、「60歳～64歳」が30.0%で、女性の方が男性より年齢層が若い。

就業形態は性別を問わず「無職」（44.1%）が最も多く、次いで「自営業」（30.1%）となった。常勤で就業しているのは男性が16.0%で女性の11.1%を上回った。

健康状態をみると、64歳以下では「健康である」と回答した割合が53.8%で最も多く、次いで「日常生活に支障はない」が41.7%であった。それに対して65歳以上になると「日常生活に支障はない」との回答が47.5%で最も多い結果となった。

配偶者の有無をみると、男性は11.7%が無配偶であったのに対して、女性では24.2%となった。家族構成は「三世帯世帯」が46.5%、「夫婦のみの世帯」が28.7%であった。

(2) 対象となる孫の属性

本調査においては対象を「最も関わりの多い孫」1名に限定して回答を得た。

居住形態は「同居」が48.3%で最も多く、近所または車などで30分未満の「近居」が40.1%であった。性別は男子が54.9%、女子が45.1%であり、学齢は「就学前」が80.0%、続柄では祖父母の性別に関わらず「息子の子」と「娘の子」がほぼ半数となった。

関わりの多い孫の母親の就業状況は「パート・アルバイト」が31.1%で最も多く、次いで「常勤」が30.6%、「無職・専業主婦」が26.9%であった。

(3) 対象となる孫との交流

交流の内容と程度を居住形態別に分析した。同じ居住形態であっても交流の内容とその程度が異なることが予測されるため、孫の年齢を就学前後で区分し、比較した。

同居の孫との交流を生活行動別に頻度で質問したところ、提示した項目のすべてにおいて、就学前の孫の方が就学後に比して交流の程度が高かった。特に「入浴」と「就寝」の2項目ではその傾向が顕著であった。

次に別居の孫との交流内容を間接的コミュニケーションである「電話」と直接的コミュニケーションである「互いの家への訪問」として設定し、それぞれの頻度を調査した。その結果、年齢区分による比較では同居孫と同様にすべての項目で就学前の孫との交流が多かった。しかし、別居孫の場合は就学以外にも居住距離によって交流の程度が異なることが予測されるため、孫が近所または車や電車で30分以内に住む「近居」と1時間以上の距離に住む「遠居」とで比較した。その結果「電話で話す」でのみ遠居孫が近居孫を上回った。祖父母と孫がお互いの家を行き来する直接的な交流は居住距離に大きく影響されていた。

(4) 「孫育て」への関わり

1) 経験

祖父母によって「最も関わりの多い孫」の年齢が多様であることから、現在ではなく、過去の孫育て経験について調査した。

「孫の保育園・幼稚園への送迎」や「遊び相手になる」、「（孫の親）夫婦が出かける時に預かる」

などの8項目について、経験の有無を質問した。なかでも孫の遊び相手になったことがあると回答した割合は、「よくある」と「ときどきある」を合計すると、93.6%という高い結果であった。孫の親に対する育児の助言や、(孫の親)夫婦が外出の際に孫を預かるといった間接的な孫育て経験は54.2%でやや低い傾向となったが、半数以上の祖父母が豊富な孫育ての経験を有していることが明らかとなった。

祖父母別で分析したものを図1に示した。経験が「ある」の割合をみると、「孫の親が買い物の際に世話をする」(祖父:57.6%, 祖母:73.6%)と「孫の親に育児の助言をする」(祖父:44.2%, 祖母:56.8%)の2項目で有意差が認められた(p<0.01)。いずれも祖母の方が高い割合であり、経験の多いことを示している。「買い物」は家事労働として日常生活で頻繁に行われており、夫婦揃っての「外出」とは異なる。したがって、孫の母親に対してその母親である祖母がかかわっていると考えられる。

居住形態別では「孫の保育園・幼稚園への送迎」および「孫の親が買い物の際に世話をする」、「(孫の親)夫婦が外出の時に預かる」の3項目で、0.1%水準の高い有意差が得られた(図2)。いずれも孫と直接的にかかわる内容であることから、近くに居住しているほど経験している割合が高いといえる。育児への助言や相談役としてのかかわりは、電話などの間接的コミュニケーションにおいても可能なことから、居住形態による大きな相違は認められなかった。

しかし、この2項目は、孫との続柄で分析すると、息子の子に比して娘の子が有意に高く(p<0.001)、娘の子である孫の方

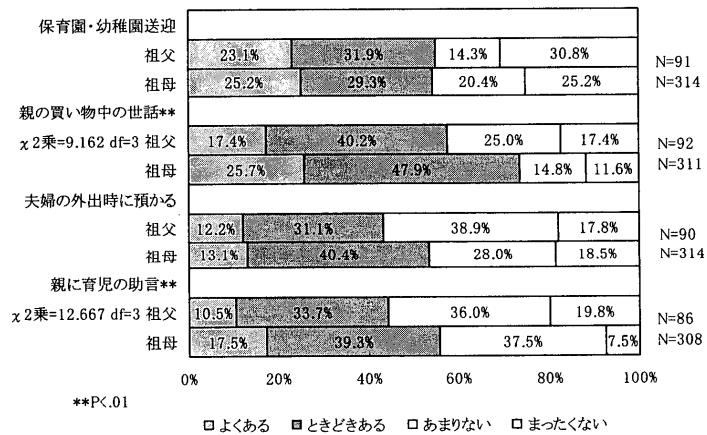


図1 祖父母別, 孫育て経験の有無

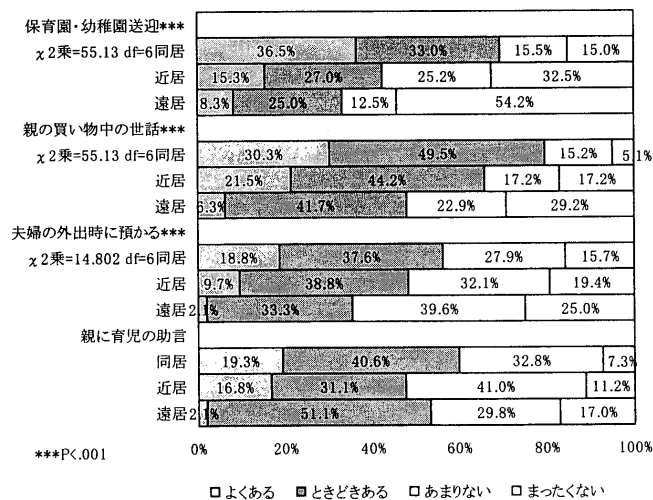


図2 居住形態別, 孫育て経験の有無

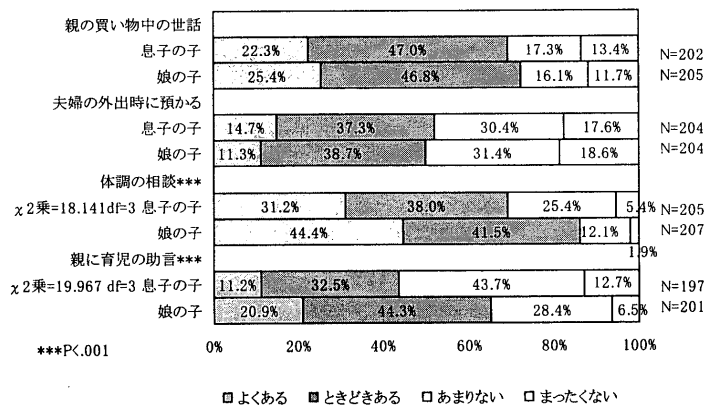


図3 続柄別, 孫育て経験の有無

で助言・相談役としての経験が多くなっていることが明らかとなった(図3)。

2) 参加理由

祖父母が孫育てにかかわる理由を調査したものを図4に示した。

「非常に当てはまる」と「やや当てはまる」を合計すると、祖父が79.7%、祖母では87.4%が「孫の世話をするのが楽しいから」という積極的な理由をあげていた。また、「家族として当然だから」とする回答も、祖父・祖母ともに高い割合を占めていた(81.1%、85.7%)。

これらの理由を強く支持しているのは祖父よりも祖母であるが、その差は僅かである。一方、「母親が仕事をしているから」や「母親ひとりでは大変だから」という消極的理由においては、祖父が51.9%と52.6%であったのに対して、祖母は63.4%と65.9%であり、それぞれ1割程度の差が生じており、後者には祖父母間に有意差が認められる(p<0.05)。祖父より祖母の方で支持する割合が高いことに変化はないが、母親の負担を同じ女性として軽減するという意識は祖母の方が強いことが明らかとなった。

併せて、祖父母の孫育ては孫の母親である女性の就業状況に大きく影響されることも確認された。孫育てへの参加理由として設定した4項目のうち、3項目に母親の就業状況別で有意な差が認められた。顕著であったのは「母親が仕事をしているから」と「母親ひとりでは大変だから」であり、0.1%水準という高い値となって表れた(図5)。母親が有職かつ常勤の場合ほど、母親の就業が孫育ての理由となっている。さらにそのことが「母親ひとりでは大変だから」という意識を強めている。また、「家族として当然だから」とする回答でも、5%水準ながら有意差が認められているのは、有職・常勤の母親に対して、祖父母が家族はお互いに助け合うものであるという義務感を強く感じることから、孫育てへの参加理由としてあげられていることが推察される。

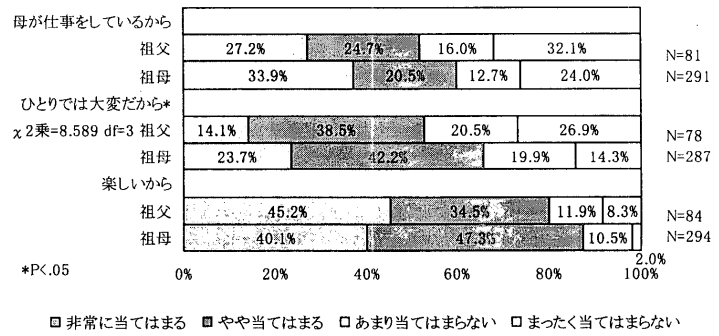


図4 祖父母別、孫育てへの参加理由

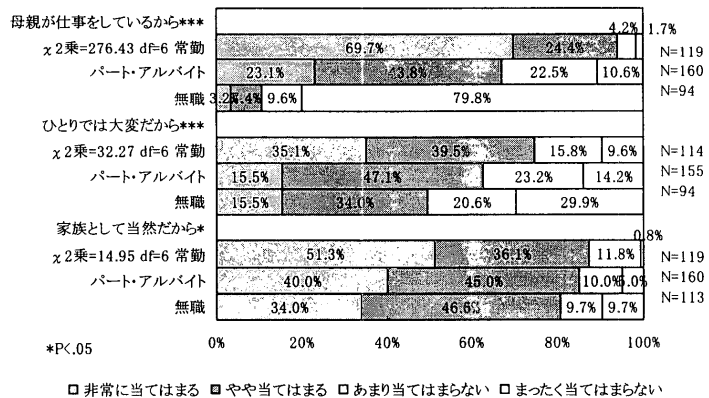


図5 母親の就業状況別、孫育てへの参加理由

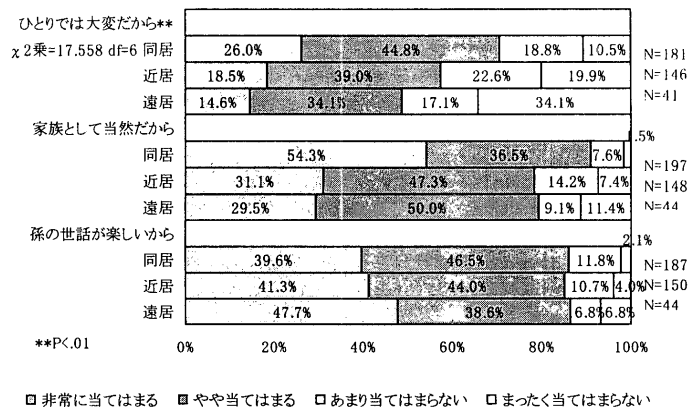


図6 居住形態別、孫育てへの参加理由

孫育てに参加する理由を居住形態との関連で見ると、「家族として当然だから」に「非常に当てはまる」と答えた割合が顕著に多かったのは「同居」の祖父母で、54.3%であった。それに対して「近居」では31.1%、「遠居」は29.5%にすぎないことから、ともに暮らすということが家族としての使命感を強くしていると考えられる。一方、居住形態による違いがそれほど表出せず、「非常に当てはまる」において「遠居」(47.7%)の方が僅かに「近居」(41.3%)、「同居」(39.6%)を上回ったのが「孫の世話が楽しいから」という理由であった(図6)。これは日常的な密着した接触ではないため、祖父母自身の生活が確保されていることによるものであると推察される。さらに「母親ひとりでは大変だから」との理由において、居住形態による有意差が認められた(p<0.01)。

孫の続柄との関連を見ると、「家族として当然だから」という理由を支持した(「当てはまる」と回答した)のは、「息子の子」(90.8%)の方が「娘の子」(78.9%)より1%水準で有意に高い。「娘の子」の方が高かった理由では「母親が仕事をしているから」があり、「非常に当てはまる」で39.2%となった。「息子の子」の場合は26.5%で、孫の母親が嫁より娘の方が、就業による祖父母の孫育て参加が高いことが明らかになった(p<0.01)。

(5) 祖父母と孫の関係意識

1) 孫の存在意義

祖父母にとって孫はどのような存在であるのかを「家族の結びつきを強めるもの」や「生活に張りや楽しみを与えてくれるもの」など10項目をあげ、それぞれについて「非常に当てはまる」から「まったく当てはまらない」の4段階で回答を求めた。

いずれの項目においても祖父・祖母は類似傾向を示しているが、「非常に当てはまる」とした割合が、祖父の方が高いものとしては「血を受け継ぐもの」(祖父：42.5%，祖母 38.0%)、「夢を託すもの」(祖父：9.0%，祖母：3.7%)があげられた。同様に、祖母の方が高い項目は「生活に張りや楽しみを与えてくれるもの」(祖父：66.7%，祖母：74.5%)、「心の安らぎを与えてくれるもの」(祖父：61.1%，祖母：71.9%)、「家族の結びつきを強めるもの」(祖父：50.0%，祖母：61.9%)などであった。孫の存在意義として精神的充足感を意識しているのは祖母の方が多かった。

祖父・祖母ともに、「家を継ぐもの」や「老後の助けとなるもの」などの伝統的家族観に基づいた存在意義は支持されていない。しかし「老後の助けとなるもの」では祖父が77.5%，祖母で70.1%が「当てはまらない」と答えていたのに対して、「家を継ぐもの」ではその割合が祖父で56.2%，祖母も56.3%であったことから、孫に負担をかけたくないという一方で、家の継承を期待するとの相反する意識も伺えた。また、孫が「老後

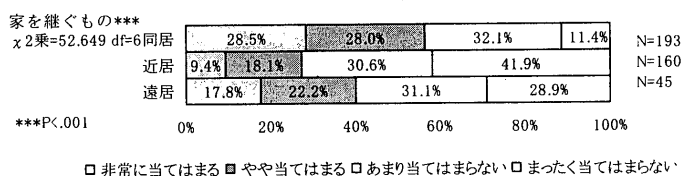


図7 居住形態別、孫の存在意義

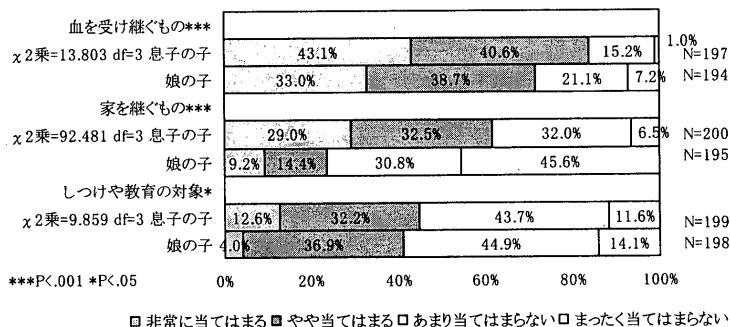


図8 続柄別、孫の存在意義

の助け」としての存在であるとした割合は、祖父よりも祖母の方が高くなっているが、これは祖母が自分自身の役割として家族の世話を行ってきたという背景が起因しているものと思われる。

有意差が認められたのは、居住形態別では「家を継ぐもの」($p < 0.001$)の1項目で(図7)、孫との続柄別では「血を受け継ぐもの」、「家を継ぐもの」($p < 0.001$)と「しつけや教育の対象となるもの」($p < 0.05$)の3項目であった(図8)。居住形態の決定要因が家の継承を強く希望することによるものであるのかは现阶段で結論づけることはできないが、血族意識や家の継承は「息子の子」の方が「娘の子」に比して有意に高いということは、家父長制度に基づく意識が根強いことを意味している。

2) 祖父母の存在意義

祖父母は孫に対する自分自身の存在意義をどのように捉えているのか調べた結果、最も多かったのは祖父・祖母ともに「優しさや思いやりの心が養われる」であり、それぞれ72.0%、83.3%であった。また、祖父では「行儀や言葉遣いが良くなる」(52.2%)や「広い人間関係を学ぶことができる」(51.1%)が、祖母では「広い人間関係を学ぶことができる」(68.8%)、「遊びなど昔のことを教えてもらえる」(53.9%)という回答が多かった。自由記述でも「多くの世代の中での子育てが非常に大切だと思う。また生活の中で食事、遊び等伝承的なものが多く体験できる。」(67歳・男性)との意見があった。

3) 祖父母としての意識

孫との関わりを祖父母はどのように感じているのかを質問したところ、最も多かったのが「生きていてよかったと思う」であり、「そう思う」と答えた祖父が67.4%、祖母は66.9%であった。次いで「若々しい気持ちになる」が祖父で47.8%、祖母は57.2%という割合であった。孫との関わりが祖父母の生きがいとなり、精神的充足感を高めている。また、多くの祖父母が孫の前では模範的な年長者でありたいと望んでいることが「手本になるよう心がけている」を支持した結果から読みとることができる。しかし、孫は「かわいいと一緒にいると疲れる」といった回答も「そう思う」と「ややそう思う」を合計すると、祖父で58.7%、祖母では57.5%に達しており、半数以上の祖父母が孫との関わりに疲労を感じていることも明らかとなった。

(6) 祖父母と孫のかかわりについての理想と現実

1) 理想とする関わり

実現可能であるかとは別に、理想とする祖父母と孫の関係をみると、祖父では「いつも一緒に生活するのがよい」が58.5%で最も高い結果となった。祖母の場合は「いつも一緒に生活するのがよい」と「ときどき会って話や食事をするのがよい」が47.1%であった。また自由記述では「できれば一緒に住んだ方がよいと思う」(66歳・女性)や「子どもが余裕のある環境で愛情を豊かに受けて育つために、祖父母と同居する生活はとてよいと思う」(57歳・男性)、「たまに会う方が気を使い、自分もいい祖母でなくてはと無理をするだろう。毎日いれば悪い面も弱い面も孫に見せて自然であると思う」(60歳・女性)、「家族は祖父母一孫で住むことが一番よいと思う」(55歳・女性)との回答があり、同居を望む意見が顕著であった。

先行研究¹⁸⁾によれば、この傾向は都市部より郡部で認められている。また、高齢者の生活と意識を調査した国際比較¹⁹⁾でも、「いつも一緒に生活できるのがよい」という意識は43.5%であり、依然としてアメリカ(8.7%)やドイツ(14.9%)、スウェーデン(5.0%)に比して高い割合を占めてはいるものの、時系列で見ると第1回の調査(59.4%)から減少し続けている。

表1 孫との実際の関わり (自由記述)

居住形態	性別	年齢	内容
同居	女性	70歳	孫が3人、父母と祖父母で7人が同居している。にぎやかでうるさいときもある。悪いことをしたときなどは親の前でも遠慮なく怒る。2番目の孫は4歳で、毎日風呂に入れてやるがその時は本当にかわいくて幸せ。
		68歳	両親に叱られた場合、泣きやむとじじ・ばばのところへ来る。理由を聞いて言い聞かせ慰める。2階と下の生活だが、帰宅してじじ・ばばがいないとさびしがり、どこに行ったのか聞く。両親がいてもばばに背負って散歩するときが一番嬉しそう。孫にとってじじ・ばばのいない家は可愛そう。
		68歳	同居してくれる息子夫婦に感謝している。おかげで可愛い孫の成長を見ることが楽しい。現在11ヶ月、3歳、5歳の孫を保育園に預けているが、毎日話題がありとても楽しみ。同居でなければ味わえない喜びであると思う。
		不明	別居家族が多い現在、同居できたことは年来の願いであり、幸せに感じている。
同居	女性	不明	同居しているのでこれが普通だと思っている。別居など考えられない。
		70歳	二世帯住宅で、嫁は常勤勤務のため必然的に面倒を見ている。孫の成長は楽しみだが、昔と違い高齢になっても自分自身の生活を楽しみたいという比重の方が大きい。子ども世帯、親世帯はそれぞれ別のものだと考え、子どもを育てながら女性が社会進出できる、女性をもっと働きやすい社会になってほしいと思う。
		67歳	孫はとても可愛いと思うが、自分も高齢になっているので子守のような関わり方は体力に無理が多くなってきてしまう。好きな時に接し、後は自由にしたい。主人が亡くなっているのに淋しいときには孫はなぐさめになっている。
		59歳	主人は日常勤務のため、孫と関わりを持ちたいといいながら仕事で疲れているときは孫が煩わしいといい、勝手である。わがままな主人に困る。
近居	女性	52歳	同居をしていると、毎日一緒にかわいさがマンネリ化してしまう。仕事をしているため相手をしていて疲れてしまうことが多い。でも孫はかわいい。
		59歳	車で10分くらいの所に住んでおり、父親の出張も多いので、家によく泊まりに来る。孫の生活が自分の目で確認できるので安心できる。うるさく感じるときもあるが、1歳3ヶ月から保育園生活を送っている孫の成長が頼もしく感じられる。
		52歳	近所で遊んでいて行き会うとすぐ寄ってきて声をかける。車で通った時は手をあげる。困った時はすぐ相談に来る。とてもうれしい。人とふれあい、温かい心の持ち主になってほしい。
遠居	女性	57歳	今は別居しているが何年後かには同居を考えている。しかし、大変である。
		55歳	核家族の現代、息子夫婦と同居して孫たちとも明るく楽しく生活したい。
	男性	63歳	同居はしていないがたびたびあって話をすることは楽しい。ただし孫が小学校に入学してからはどうなるか？自分には該当しないが息子の子の場合、一般的に同別居に関わらず嫁との関係はすっきり付き合えないと聞いているが同感である。

2) 実際の関わり

孫との実際の関わりについて自由記述による回答を表1にまとめた。先述したように、本調査では「いつも一緒に生活する」ことを理想とする意識が高かったが、現実の関わりでは不満に感じることもあるようだ。また、遠居の場合にはさらなる交流を望んでいたり、孫の成長によって関わりが減少することを危惧する意見がみられた。

3) 孫との関わりで心がけていること

孫育ての方針として、孫との関わりで心がけていることを質問したところ、育児の主体である孫の親を補助する範囲で関わりたいと考えているようである。場合によっては厳しい態度で接するべきであるという孫育て方針は、祖母より祖父が主張していた（表2）。

表2 孫との関わりで心がけていること（自由記述）

性別	年齢	内容
	71 歳	孫は家族だが子どもではないのであまり口を出してはいけないと考えている。一般的に今の子どもはわがままだと思うがとても可愛くて素直だ。
	65 歳	自分の子どもは「他人と同じ」感覚でみることにしているが、自分を親として頼ってきたり相談にすれば誠意を持って関わる。孫のことも両親がいて育てているので「どうしても」というとき以外は口を挟まないようにしている。
女性	65 歳	祖父母・孫家族が同居している場合、孫を育てるにあたりみんなが同じ意見でなければならないと思う。それぞれ違った意見では何を信じていいのか迷いが出てしまう。それには家族みんなが話し合うことが大切だと思う。
	58 歳	特別なことはしない。普通に接している。悪いことをすれば叱り、よいことをすればほめてやる。子どもと同じ気持ちで接している。
	52 歳	時代が違うからというひとことで物事を片付けない。基本的には変わらないと思うので、昔のよかったことをどンドン話して行きたい。
	73 歳	ほとんど父母によるしつけに任せているが、助言や必要なときには関わりたい。
男性	69 歳	孫の健全な成長のために、テレビゲームやパソコンなど電子メディアに触れる前に、豊かな音声言語と文字言語を身につけた人と対話できる人になってほしいと願う。そのために絵本の読み聞かせや、会話が大切であると思う。不十分だが日ごろ心がけている。
	68 歳	孫のかわいさにおぼれることなく毅然とした態度で教育すべきだと思う。
	68 歳	孫には甘いですが、礼儀や行儀あいさつには厳しい対処をしている。

4 結び

本調査では、祖父母の多くが孫との交流に意欲的であることが明らかとなった。また、孫との関わりがもたらす肯定的な影響として、「日々の生活に張りや楽しみをもたらす」、「若々しい気持ちになる」などといった高齢者の生きがいに繋がる回答を得た。これは祖父母が「孫育て」において、自らの主観的幸福感につながるような有用感、生活満足感を高めている²⁰⁾ことをあらためて実証す

る結果であり、高齢者の間に、自分は単に社会から「保護・援助される」だけでなく、社会にとってまだ役に立ち、「必要な」存在であるという意識を広めるためにも、世代間交流には意義がある²¹⁾といえる。

また、祖父母と同居していると、祖父母を手がかりにして高齢者を理解するので高齢者の生き生きとした姿を思い浮かべることができるのと同時に、高校生の高齢者観は小学生の時の反応を引き継ぎ、拡大した感じで形成されている印象を受けるが、高齢者への理解という観点だけから同居が望ましいなどというのは視野が狭いように思う²²⁾との指摘もある。同様に、児童と高齢者の交流が多いほど肯定的な老人観を抱くようになることも明らかになっているが、単に祖父母と同居しているか否かは児童の老人観に影響を及ぼさず、世話を受けたかどうかとか、密度の濃い交流によって老人観は形成されている。また、日本の児童は、諸外国に比べてネガティブな老人観を抱いているものが少なくないことも確認されている²³⁾。

単独世帯化・核家族化の進行、三世帯世帯の減少という家族形態の変化は今後も継続していくことが予測される。子どもや若年世代と中・高年の異世代間交流を、祖父母と孫が同居することのみに期待するのは現実的であるとは言えない。親族であることや居住形態に条件が限定されてしまえば、そこに該当しない者には交流の機会が得られないということになってしまう。家族や家庭内のみならず、地域社会へと交流のネットワークを拡大していく必要がある。

さらに、孫育てを中心とした異世代コミュニケーションを推進するための課題として、新しい孫育てのあり方を模索するなかで、現代の祖父母をもっぱら孫育てをして余生を送るイメージでとらえることはできないこと、孫育てに消極的だからといって、孫に対して関心がないわけではないことをあげている。また、孫との関わり意識が地域によって異なることから、その実情に即した交流として、日常的に接触が多い場合には親と祖父母との軋轢を緩和し、日常的な接触が少ない場合には高齢者の知恵とパワーの積極的な提供をあげている。さらに、祖父の方が積極的に孫育てにかかわりたいと思っているものが多いことから、現代における「おじいちゃん役割」を再構築する必要性が指摘されている²⁴⁾。このことは、親族、特に祖母の育児援助が「子育ては女」という社会の役割分業を反映するものであり、家族の中で子どもたちに性別役割分業を再生産していくことにつながるという問題²⁵⁾の解決に対する方向性を示していると考えられる。

多くの高齢者が抱く孤立感や不安に対処するために、あるいは多くの青少年が直面する、教育や職業選択の際の、周囲のプレッシャーや不安を緩和するためにも、伝統的な家族の援助機構だけでは十分でないことは明らかである。老いも若きも子どもも、誰もが家族や地域内での交流において、積極的に人的資源としての役割を果たすことができる、性別や年齢を超えたコミュニティづくりがさらに重要となっていくことは確実である。

欧米では「世代間交流」が学問の一分野として定着してきており、広範な社会学者、教育者、社会教育研究者や行政、地域活動家と共に共同行動を行うことのできる概念的、組織的な基盤が形成されている。日本にはそのような「分野」が現在まだ確立していない。さらに、世代間交流プログラムが、公共政策分析や学問研究の領域として、どこに適合するのかわきも明確になっていない。日本では、各専門分野の協力や諸機関の連携を容易に築くことはできないが、全国的に実施されている多彩な世代間交流のプログラム・モデルを、概念的・組織的に提携させるための社会政策の展望と焦点を明確にしなければならない。

今後の子ども、青年、中年、高齢者の世代間交流のためには、①「世代間交流学会」、「世代間交流センター」（「子ども・青年・中年・高齢者センター」）の創設、②中年・高齢者世代と青年、子ど

も世代との双方向による支援プログラムやシステム作りに加えて、これを担当するコーディネーターの研修、養成、カリキュラム作り、③政府や地方自治体による「社会サービス法」、「コミュニティ・ケア法」の制定などの具体的な政策が行政・民間等によって実行に移される必要がある²⁶⁾。

最後になりましたが、本調査にご協力をいただきました保育園と、お忙しいなか、調査に答えていただきました皆様に厚く御礼申し上げます。

引用文献

- 1) 牧野カツコ「現代家族の教育機能」, 望月嵩・本村汎編: 現代家族の危機, 有斐閣, 1980, pp. 186-189
- 2) 草野篤子・高橋桂子「世代間交流と地域通貨」, (社) 日本家政学会家庭経済学部会関東地区会編: 少子高齢社会と生活経済, 建帛社, 2004, pp. 166-180
- 3) 山崎高哉「重要になる家庭外での世代間の交流」, 関口礼子編: 高齢化社会への意識改革—老年学入門—, 勁草書房, 1996, p. 54
- 4) 影山任佐: 「空虚な自己」の時代, 日本放送出版協会, 1999, pp. 60-61
- 5) 藤本信子「祖父母・孫関係に関する研究」, 上子武次・増田光吉編: 三世代家族—世代関係の実証研究—, 垣内出版, 1976, pp. 175-195
- 6) 田中幸恵・黒田玲子・菊澤康子・戸谷修: 孫・祖父母間の交流の様態—交流の実態と交流に影響を与える要因—, 日本家政学会誌 38(7), 1987, pp. 611-622
- 7) 河合千恵子・下仲順子: 老年期におけるソーシャルサポートの授受—別居家族との関係の検討—, 老年社会学 14, 1992, pp. 63-72
- 8) 高田洋子: 祖父母・孫関係の現状とその規定要因について—北陸地方の一都市を事例に— (第1報), 日本家政学会誌 44(10), 1993, pp. 823-830
- 9) 高田洋子: 祖父母・孫関係の現状とその規定要因について—北陸地方の一都市を事例に— (第2報), 日本家政学会誌 44(10), 1993, pp. 831-837
- 10) 神川康子・渡辺彩子・荒井紀子: 北陸3県の調査による父母・祖父母の生活活動が児童・生徒の福祉観・高齢者観に与える影響, 日本家政学会誌 47(7), 1996, pp. 641-649
- 11) 深谷昌志「家庭内での世代間交流」, 関口礼子編: 高齢化社会への意識改革—老年学入門—, 勁草書房, 1996, pp. 37-51
- 12) 堀智晴・泊祐子・又賀淳・早川淳・杉井潤子: 祖父母・孫関係に関する—研究②—祖父・孫関係の事例研究—, 大阪市立大学生生活科学部紀要 41, 1993, pp. 137-144
- 13) 杉井潤子・泊祐子・堀智晴・早川淳・又賀淳: 祖父母・孫関係に関する研究—第3報—「孫育て」にみる祖父母の位置づけおよびその主観的評価—, 大阪市立大学生生活科学部紀要 42, 1994, pp. 141-153
- 14) 兵庫県家庭問題研究所: 祖父母と孫のかかわりに関する調査報告書—祖父母の「孫育て」をめぐる—, 1994
- 15) 杉井潤子・堀智晴・泊祐子・早川淳: 祖母の「孫育て」に関する研究—主観的幸福感との関連において—, 家族関係学 15, 1996, pp. 89-102
- 16) 綿引伴子・牧野カツコ: 女子高校生の高齢者についての関心と学習要求, 日本家庭科教育学会 36(1), 1993, pp. 51-58
- 17) 中西雪夫: 男女共通必修家庭科の実施が高校生の家族・保育に関する意識に与えた影響 (第3報)—高齢者観・親になることへの準備状態の変化—, 日本家庭科教育学会誌 44(4), 2002, pp. 354-360
- 18) 前掲 14)
- 19) 内閣府監修: 高齢者の生活と意識 第5回国際比較調査結果報告書, ぎょうせい, 2002, p. 14

- 20) 前掲 13), p. 152
- 21) 前掲 3), p. 55
- 22) 前掲 11)
- 23) 中谷陽明：児童の老人観—老人観スケールによる測定と要因分析—, 社会老年学 34, 1991
- 24) 前掲 14), pp. 93-102
- 25) 久保桂子：父親の家事・育児参加と親族の育児援助—保育園児の父母調査より—, 家庭科教育 73 (3), 家政教育社, 1999, pp. 55-59
- 26) 草野篤子：インタージェネレーションの歴史, 現代のエスプリ 6月号, 至文堂, 2004, 印刷中

(2004年5月24日 受理)